

第2節 環境

1. 自然環境

(1) 地形

宝満山は三郡山系の南西端部にあり、主峰は竈門神社上宮社殿のある標高829mのピークを主体とし、北東側に尾根続きのもう一つのピークである仏頂山に連なる。山容は北西側の福岡市から見ると三郡山系を胴とする象の頭のように見え、南東の筑紫野市側からの姿は左右均等に山裾が広がるいわゆる「神奈備山」形の独立峰に見える。そのこともあってか中世以前の記録には宝満山の古名を「御笠山」とし、山に雲の掛かる姿をもとにしてか「竈門山」とも表記している。

宝満山からの眺望は素晴らしく、北を向くと至近の三郡山から若杉山に至る山並みが連なり、北西側には福岡平野が広がり、海の中道、志賀島の周りに玄界灘が開ける。西には眼下の四王寺山、その先の油山、少し南に目をやると九千部山、脊振山、雷山に至る山並みが連なる。南西側には筑紫平野が広がり、有明海の向こうには雲仙普賢岳がかすかに見える。南側は耳納連山のなだらかな山並みがあり、その東奥には九重連山を眺める。さらに東には同じく修験道の山である英彦山や鷹ノ巣山の山並みが目に入る。

三郡山から宝満山に延びる山の背は、南西側の筑紫野市二日市に下り分水嶺となっている。このため宝満山の南斜面から派生する宝満川は筑後平野を南に下り有明海に注ぎ、北斜面の宇美川と御笠川は福岡平野を北に下り玄界灘に注いでいる。宝満山はまさに筑紫地域を南北に分ける水くまりの山となっている。



図 2-4 宝満山地形概要図

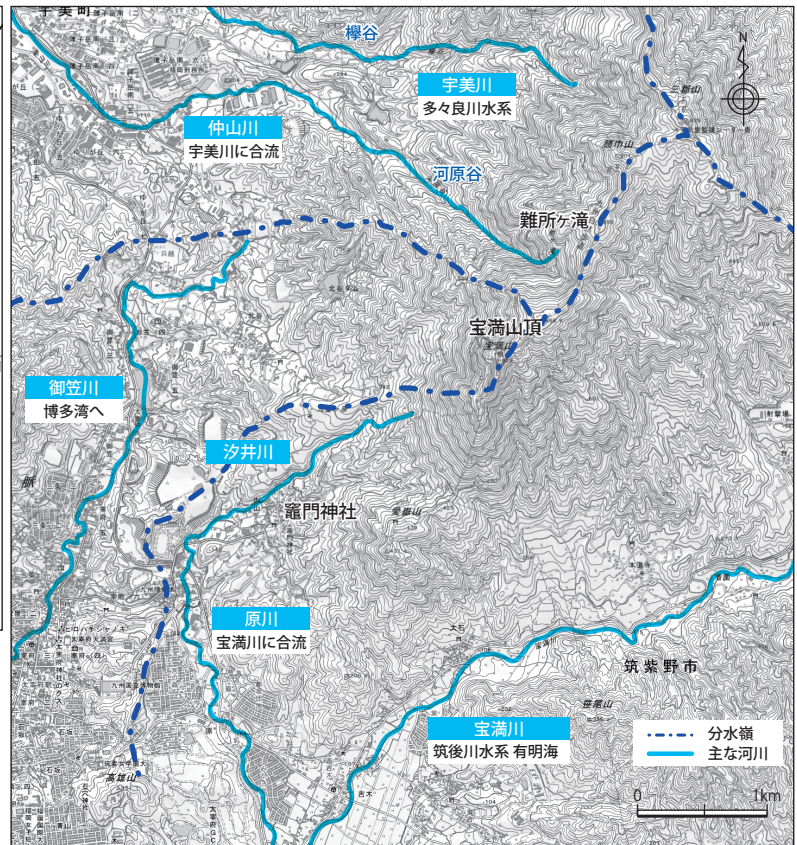


図 2-5 宝満山周辺水系図

(2)地質

太宰府市や筑紫野市域には基盤となる古く硬い岩盤として花崗岩かこうがんが広く分布しており、宝満山など浸食の激しい場所では急峻な山地を形成している。宝満山周辺の地質は、山頂をはじめとして、早良型花崗岩(中生代白亜紀)で構成されている。この岩盤の模式地は福岡市の油山あぶらやま周辺で、宝満山周辺は早良型花崗岩の東端部にあたる。丘陵部では深層風化により数十メートルの深さまで土壌化して「マサ」と呼ばれる粗粒土層の状態となっている。

丘陵地の裾には第四紀層からなる数種類の台地(中期段丘面、阿蘇4火砕流台地、後期段丘面など)が存在している。竈門神社近隣、筑紫野市本道寺ほんどうじ周辺等に分布する中期段丘面(後期更新世の中位段丘堆積物)は砂礫層で構成されており、北谷川上流などの山麓では巨礫も含まれている。太宰府市南部及び筑紫野市中央部付近には阿蘇4火砕流堆積物からなる火砕流台地がまとまってみられる。後期段丘面(後期更新世の低位段丘堆積物)は御笠川沿いでは太宰府市中部の観世音寺かんぜおんじ付近、北部の北谷付近、宝満川沿いに筑紫野市大石、本道寺ほんどうじ付近、それに大佐野川沿い、鷺田川沿いなどに分布しており、中央部では新世紀段丘(後期更新世～完新世の沖積地堆積岩類)とともに二日市低地帯を構成し、沖積面より一段高い平坦面を形成している。

活断層として、警固断層と宇美断層がある。警固断層は博多湾から福岡市中心、太宰府市大佐野を経て筑紫野市諸田付近に至る断層である。宇美断層は糟屋郡須恵町付近から太宰府市北谷、内山を経て筑紫野市吉木付近に至る断層である。

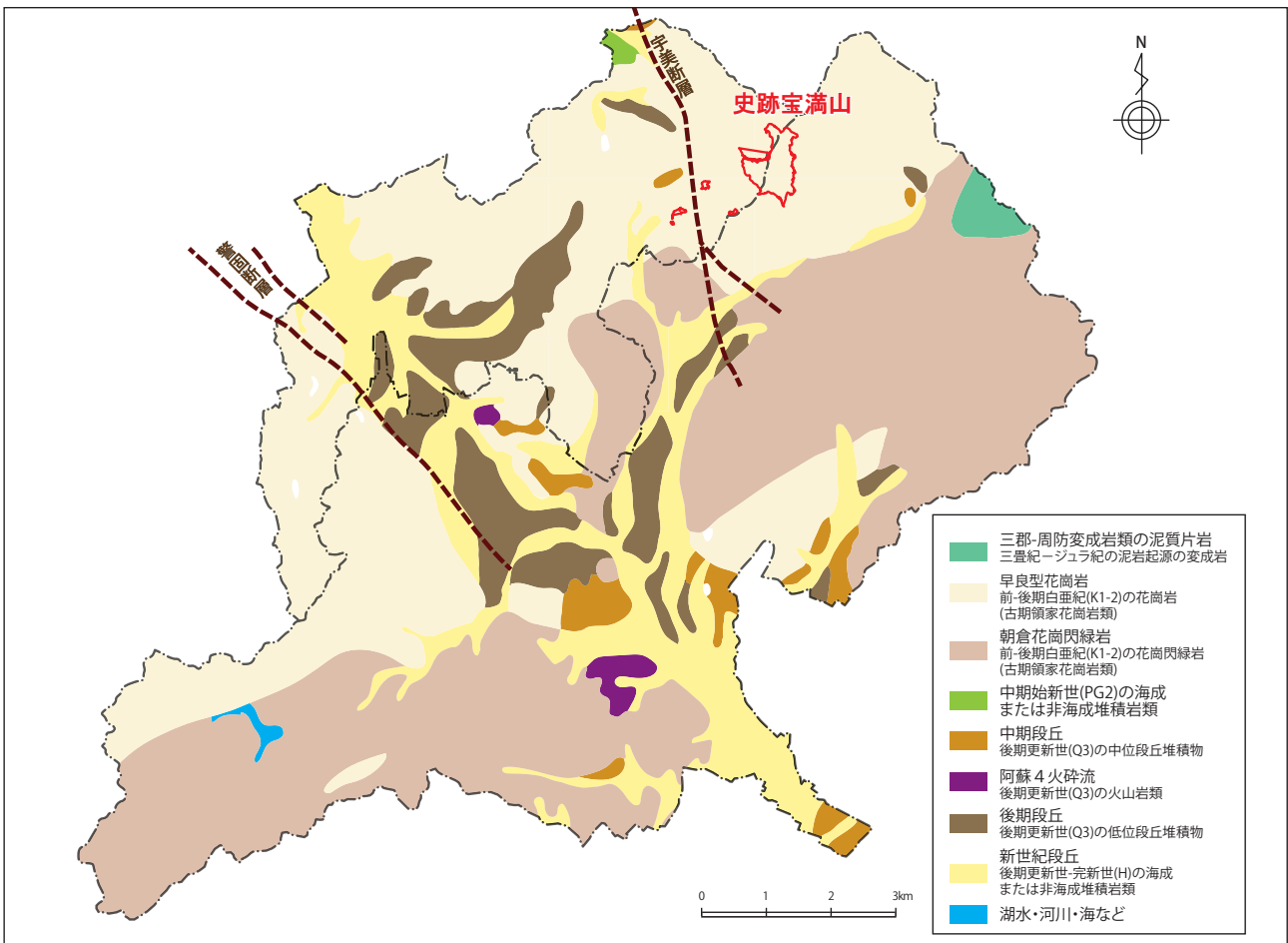


図 2-6 宝満山地質概要図 (産総研地質調査総合センター,20 万分の 1 日本シームレス地質図より)

(3) 気候

筑紫野市や太宰府市が含まれる北部九州は日本海型気候区に属し、年平均気温は16～17℃と比較的温暖的な地域である。博多湾から15km程離れた内陸であり、秋から春にかけて霧の発生も多く、盆地型の傾向を示し、冬季には霜が降り、氷結する日もある。

平成30年(2018)で見ると、月平均気温では1～2月が4℃前後と最も低く、7～8月には28℃を超えている。降水量は、年間2,000mm程度で全国平均より若干多い。

宝満山は、山地型気候区(年平均気温14℃以下でかつ1月平均気温4℃以下の山地)で、県内の、おおむね標高200m以上の山地はこの気候区に属する。11～4月は降霜が見られ、12～4月は降雪がある。山地上部では、積雪の有無が植生に影響するが、標高の高い英彦山地や脊振山地の中腹以上ではしばしば降雪があり、山頂付近では時として50cmに達する場合もあるが根雪となることはまれである。宝満山を含む三郡山地などでも積雪はみられるが、脊振山や英彦山と比較するとその量は少ない。

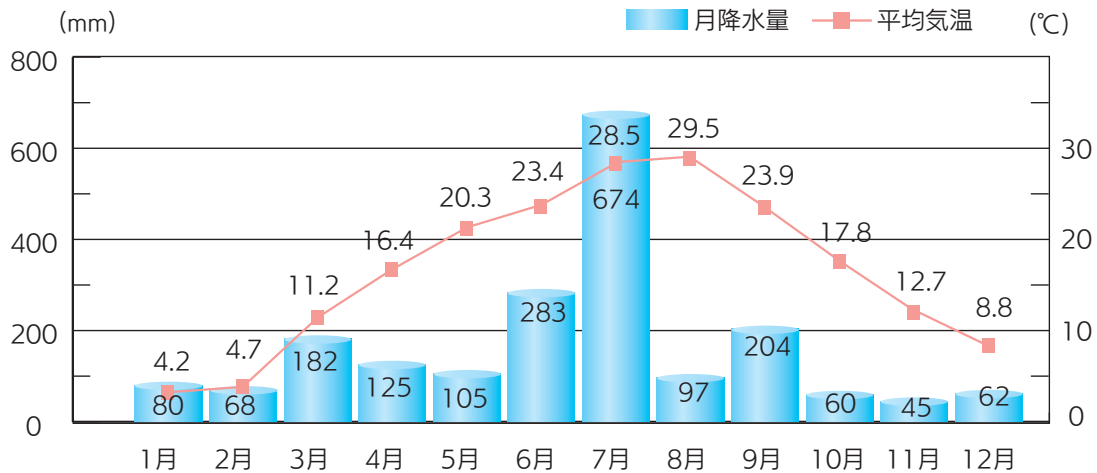


図 2-7 平成 30 (2018) 年 月別平均気温と降水量 (資料：気象庁 HP 太宰府観測所)

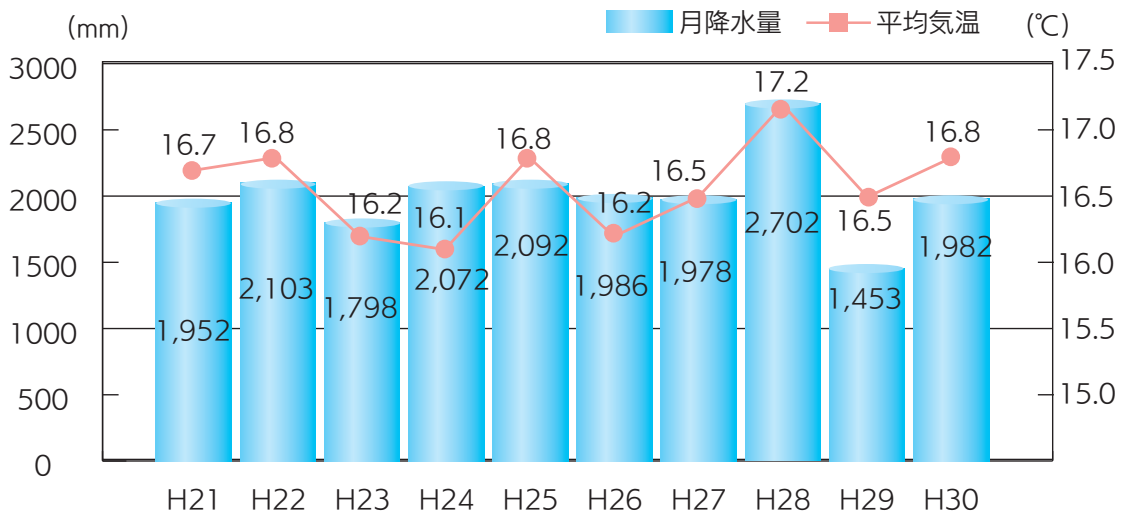


図 2-8 過去 10 年間の平均気温と降水量 (資料：気象庁 HP 太宰府観測所)

(4) 動植物

1) 植物

宝満山一帯は現在、自然林および二次林、植林などで覆われている。標高730mの中宮跡付近から宝満山、仏頂山の山頂にかけては自然林が多く、照葉樹林帯上部のアカガシ群落と夏緑樹林帯下部のブナ群落、それに中間温帯の植生であるモミ群落が混生している。宝満山での各群落を構成する代表的な種は次の通りである。

ブナ群落：ブナ、コハウチワカエデ、シラキ、ウラジロノキ、アカシデ、イヌシデ、オオカメノキ、ヤマシグレ、シロモジ、コバノミツバツツジ、ウンゼンカンアオイ(草本)など(典型的群落の生育地→宝満山頂直下の仏頂山側尾根筋、頭巾山付近の西側斜面)。

モミ群落：モミ、カヤノキ、キッコウハグマ(草本)などモミ群落を標徴する植物の他、アカガシ群落やブナ群落の種群(典型的群落の生育地→仏頂山西側尾根)。

アカガシ群落：アカガシ、シキミ、ハイノキ、ツルシキミなどのアカガシ群落の標徴種のほか、ヤブツバキ、シロダモなど照葉樹林の代表種、ブナ群落を構成する多くの種群(典型的群落の生育地→筑紫野市東院谷の座主跡から水場にかけての東側上部斜面)。

この他、老木を含む古くから植林されたスギ・ヒノキ林も、女道^{おんなみち}から座主跡にかけての南側斜面を中心にかなりの面積を占めている。これらの林齢の古い上部植林の中にはブナ、モミ、アカガシ群落の種群も混生している。なお、林野庁作成の林班地図によれば、仏頂山北西のモミ林の林齢は約160年である。これらの宝満山から三郡山にかけての自然林は太宰府県立自然公園の中心部分であり、標高700m以上は第1種、第2種、第3種特別地域に指定されている。また環境省から、三郡・宝満山の自然林として、特定植物群落に指定されている。

二次林(雑木林)は1960年代では定期的に伐採され薪や炭焼などに利用されていた林分である。



写真 2-13 ブナ群落
(資料：福岡県の希少野生生物 HP)



写真 2-14 モミ群落
(資料：福岡県の希少野生生物 HP)



写真 2-15 アカガシ
(資料：九州自然歩道自然観察マップ)

その当時は、晩秋から冬場にかけて仏頂山から三郡山にかけての尾根筋で、良く炭焼の材料として林木を伐採する姿が見られた。この時代の縦走路は一部の急斜面や谷筋を除いては、2～3m前後の低木林が中心であった。その後、高度経済成長期に入ると同時に、電気やガス、石油などを使用する生活様式に変わって二次林の利用が無くなり、現在では10～15mの落葉広葉樹林(シデ群落)に成長しており、春の新緑や秋の紅葉は見事である。主な樹種は次の通りである。

コハウチワカエデ、ウリハダカエデ、アカシデ、イヌシデ、シラキ、タカノツメ、ネジキ、リョウブ、タンナサワフタギ、カマツカ、ウラジロノキ、コバノミツバツツジ、オオカメノキ、ヤマシグレ、ヤマボウシなどの落葉樹が中心で、この中にアカガシ、モミ、シキミ、ヤブツバキ、ハイノキなどの常緑樹が点在している。

宝満山頂から三郡山にかけての、主尾根を走る縦走路の筑紫野市側斜面の一部ではモミの植林も行われ、現在では立派なモミ林となっている。また、その下部から三郡山頂にかけては広大な面積のアカガシを中心とした雑木林も成長を続けている。

中宮跡上部から羅漢道^{らんげんみち}沿いの西側斜面は主にアカガシ林となっている。式部稻荷^{しきぶいなり}上宮付近では大木も見られるが、急斜面や巨岩の露出部分も多く樹木の生育条件は良好とは言えない。しかし、絶壁の下部では土壌の堆積も見られ、部分的にブナ林が生育している。ここのブナ群落は、九州で最も標高の低い場所(650m付近)で生育している貴重な群落である。標高600m付近から下部はスギ・ヒノキ植林地と、アカガシのほか、シイノキ、タブノキ、ウラジロガシ、ヤブツバキ、クロキ、ハイノキなど照葉樹林の樹木を交える植生となってくる。

宝満山山麓では、鎮守の森を中心に典型的なスダジイ群落が見られる。その代表は竈門神社本殿裏の社叢^{しゃそう}である。胸高直径80cm程度のスダジイの大木が群生し、他にイチイガシ、サカキ、ヒメユズリハ、アラカシ、ヒサカキ、ネズミモチ、カクレミノ、ヤブツバキなど典型的な照葉樹林構成種が見られる。この森は、竈門神社のスダジイ林として、環境省の特定植物群落に指定さ



写真 2-16 竈門神社社叢



写真 2-17 アカマツ (宝満山西部)

れている。

宝満山東斜面の山麓には、筑紫野市^{ゆすぼる}袖須原、本道寺の^{おおやまづみじんじや}各大山祇神社、大石の^{たかきじんじや}高木神社など各集落の鎮守の森に巨木や老木が生育している。筑紫野市袖須原大山祇神社のイチヨウ、本道寺大山祇神社のシイノキ、大石高木神社のムクノキは、筑紫野市の5大木の中に入っている。この他、袖須原大山祇神社のタブノキ、モッコク、ヒノキ、大石高木神社のシンジュ、イヌマキ、ケヤキなどは見事な老木である。また、本道寺大山祇神社裏の社叢林は、小規模であるが立派なスタジイ林である。

区域内に自生する植物のうちウンゼンカンアオイ、エビネ、スズサイコ、チャボツメレンゲは環境省の絶滅危惧植物に指定されている。これらをはじめキキョウ、セッコク、アケボノシュスラン、ヒトツボクロ、フタバアオイ、ヒロハテンナンショウ、ミヤマヨメナ、ヤマブキショウマ、リュウキュウマメガキ、リンドウが福岡県の絶滅危惧植物に指定されている。

かつては、山麓から中腹にかけての尾根筋には広くアカマツ林が見られた。高木層はアカマツが優占種し、ヒサカキ、ネズミモチ、クロキなどの常緑樹や、コナラ、ネジキ、リョウブなどの落葉樹が亜高木層や低木層に見られる典型的な里山林であった。草本層はウラジロやコシダが中心で、林床の植生が貧弱なところでは秋にはマツタケなども見られた。しかし、里山の利用が無くなった1970年頃から林床の富栄養化が進行し、アカマツが次第に弱ってくると共にマツノザイセンチュウによる松枯れが進行してアカマツ林は消滅してしまった。山麓や中腹のシイ・カシやコナラ・リョウブなどの常緑・落葉混交二次林(雑木林)は、かつてのアカマツ林のその後の姿である。

現在、山腹や山麓の集落上部などに見られるスギ・ヒノキ植林や竹林は、古代～近代までは、生活利用林としての雑木林や原野・草原 = 牧場・茅場など、^{しんもろう}榛莽地*や^{しんまつ}薪秣地*として里山利用されていた部分である。家具の部品、クワやカマなど農具の柄、お椀や箸、竹編みの籠など、各種用材として使用されていた。このような雑木林や草原・原野の里山利用は40～50年前で終わり、国の指導により順次植林が行われた。しかし現在では、スギやヒノキ、竹類の用途が限定されると共にその価値が低下してしまい、これらの林の多くは手入れが行われずに、その多くは荒廃している。



写真 2-18 ウンゼンカンアオイ



写真 2-19 アケボノシュスラン

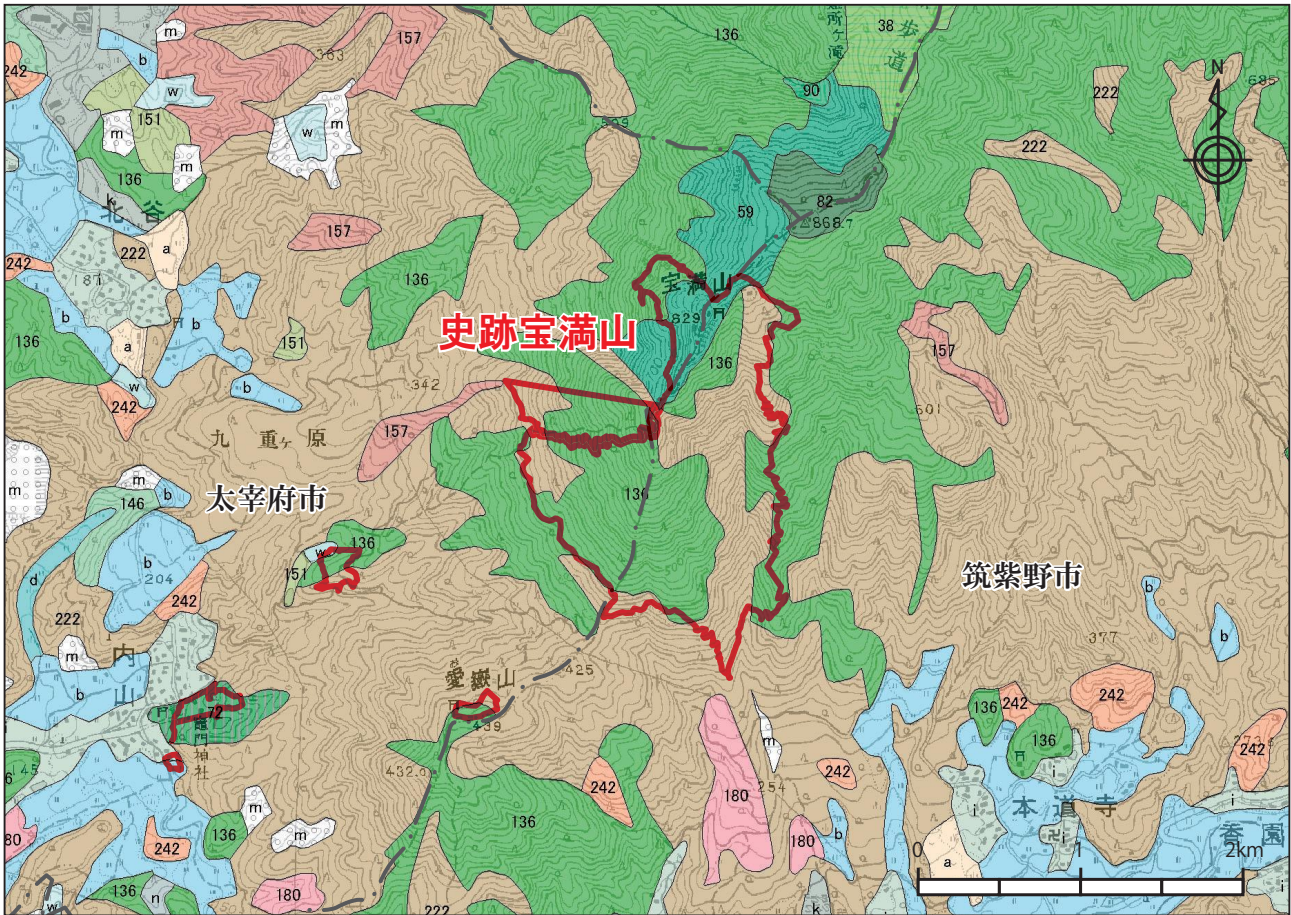


図 2-9 現存植生図 (自然環境保全基礎調査：環境省)

※榛莽地…草木が群がって生い茂っている場所
 ※薪林地…薪や馬草を採る場所

38	アカンデーイヌシテ群落 (V)	151	アカメガシワ・カラスサンショウ群落	k	市街地
59	ミヤマシキミーアカガシ群集	157	アカマツ群落 (VII)	i	緑の多い住宅地
72	ミズバイースダジイ群集	180	伐採跡地群落 (VII)	h	造成地
82	シキミーモミ群集	222	スギ・ヒノキ・サワラ植林	n	干拓地
90	イロハモミジケヤキ群集	242	竹林	w	開放水域
136	シイ・カシ二次林	a	畑雑草群落		
146	コナラ群落 (VII)	b	水田雑草群落		

2) 動物

宝満山及びその周辺の動物について述べる。

哺乳類では人工林、自然林にイノシシ、ニホンジカ、ムササビ、ニホンザル、キツネ、タヌキ、テン、アナグマなどが、山の洞窟にはククガシラコウモリが生息している。

鳥類では主に留鳥 9 種、夏鳥 4 種、冬鳥 8 種、旅鳥 1 種、外来鳥 3 種が確認されている。

爬虫類が 4 種、両生類が 5 種確認されており、溪流そばの落ち葉下などに生息するブチサンショウウオは特に保護が必要な両生類である。

昆虫類では 17 種が生息している。

魚類はタカハヤ、ヨシノボリ、甲殻類はサワガニが生息している。

毎年 5 月頃に竈門神社周辺など麓の溜池や水田でふ化したヒキガエルのオタマジャクシは、6 月頃に足が生えると体長約 1 cm の体で宝満山の山頂を目指し、約 1 カ月かけて登っていく。そして翌春には産卵のため麓におりてくる。この上り下りは登山者の楽しみにもなっている。

宝満山一帯で見られる動物（※）は福岡県の絶滅危惧種

- 【哺乳類】 イノシシ、キクガシラコウモリ、キツネ、テン、タヌキ、アナグマ、ムササビ(※)
- 【爬虫類】 カナヘビ、トカゲ、マムシ、ヤマカガシ
- 【両生類】 シュレーゲルアオガエル、ダゴガエル、ニホンヒキガエル(※)、ヤマアカガエル(※)、プチサンショウウオ
- 【魚 類】 タカハヤ、ヨシノボリ
- 【甲殻類】 サワガニ
- 【昆虫類】 ヤクシマトゲオトンボ(※)、オニヤンマ、ヒグラシ、ニワハンミョウ、マイマイカブリ(※)、ミヤマクワガタ、コクワガタ、アオカナブン、カブトムシ、ヤマトシリアゲ、ミヤマセセリ(※)、モンキアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、ツマキチョウ、キリシマミドリシジミ、クロシジミ(※)、フジミドリシジミ(※)
- 【鳥 類】 <留鳥> アオゲラ、コゲラ、イワツバメ、キセキレイ、モズ、ウグイス、ヤマガラ、ホオジロ、イカル
<夏鳥> ホトトギス、センダイムシクイ(※)、キビタキ、オオルリ(※)
<冬鳥> ハイタカ、ノスリ、ルリビタキ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミ、キクイタダキ、アオジ
<旅鳥> コサメビタキ(※)
<外来鳥> ガビチョウ、ソウシチョウ、カワラバト



写真 2-20 ニホンヒキガエル
(資料：福岡県の希少野生生物 HP)



写真 2-21 ムササビ
(資料：福岡県の希少野生生物 HP)

(5) 景観

宝満山は広大な山林が広がり、これらの山林では植林が多いものの、豊かな自然景観を呈している。特に宝満山山頂から三郡山一帯は太宰府県立自然公園第1種特別地域及び第3種特別地域に指定されており、特に優れた自然景観を示している。

太宰府市側では宝満山を源流とする御笠川が地域を縦断しており、その流れを水源とする北谷ダム、松川貯水池は、市民の重要な水瓶となっている。また、御笠川沿いに市街化区域が指定され、古くからの集落と開発による住宅団地が入り混じっている。近年、竈門神社周辺には観光客を対象とした商業施設が増えている。

筑紫野市側では、御笠地域の中央を流れる宝満川沿いに優良農地が広がるが、対照的に宝満山への登山口である大石、本道寺地区等の山間部には休耕田畑等の荒廃地が点在している。宝満山は古くは御笠山と呼ばれていたがこの山容は筑紫野市側から見た際、笠の形に見えることに由来すると考えられている。宝満川はかつて蘆城川と呼ばれており、太宰府市側を流れる御笠川よりも水量が多く、流域には肥沃な平野が広がっている。『万葉集』では、蘆城川が流れる地を蘆城野(現在の筑紫野市大字阿志岐、吉木一帯)と呼んでおり、風光明媚な土地として知られている。

ここには蘆城駅があり、大宰府の官人達がたびたび宴を催した。その素晴らしい景観の核には宝満山があったことはまちがないと言われている。

このような景観に対する方針を両市では以下のように定めている。

太宰府市では、太宰府市景観まちづくり計画・景観計画を策定し、市全域で“古都太宰府の風景”を形成することを目標にかかげている。市北東にある宝満山、北の四王寺山^{しおうじ}、西の平地に築かれた水城跡^{みずき}の地勢を活かして都市を形成したことから、これら山の姿を守ることは古都太宰府の風景を守るうえで重要であるとしている。

宝満山及びその麓にある内山地区、北谷地区など美しい農村集落が残る地域は自然と歴史と暮らしを表す景観として、山並み共生区域(自然環境と生業が溶け合う区域)に設定されており、景観形成の方針、景観形成基準、届出対象行為を定め、農業、工業などの生産環境が緑を保全・創出・再生することにより、宝満山の山並みと溶け合うような景観形成を目指している。

また、眺望点である宝満山、竈門神社からの眺めは“古都太宰府の風景”にふさわしい自然の風景やまちなみが保全・創出されているかを確かめるうえで不可欠であるとし、良好な眺望景観の形成、眺望点の整備等を方針に掲げている。さらに眺望点と眺望の対象を見下ろす(俯瞰)、見上げる(仰観)に分け、眺望点からの見晴らし、眺望点へのアクセス、市街地から山並みを望める視点場の確保などの方針を定めている。

また、竈門神社前地区は屋外広告物の規制・誘導が景観形成に特に重要な地区として、竈門神社前広告物景観育成地区に定められており、地区の特性に応じた景観育成基準による広告物の景観誘導を図っている。

筑紫野市では第二次都市計画マスタープランを策定しており、そのなかで宝満山及びその周囲を含めた自然景観について方針を定めている。宝満山とその周囲は都市構造では山林ゾーンに分類され、自然生態系の維持、自然景観の形成を図るとしている。また、御笠地域のまちづくりとして、森林の継続的な維持管理等による動植物の生態系にも配慮した自然環境・景観の保全を推進している。



写真 2-22 宝満山遠景（東斜面 筑紫野市側）

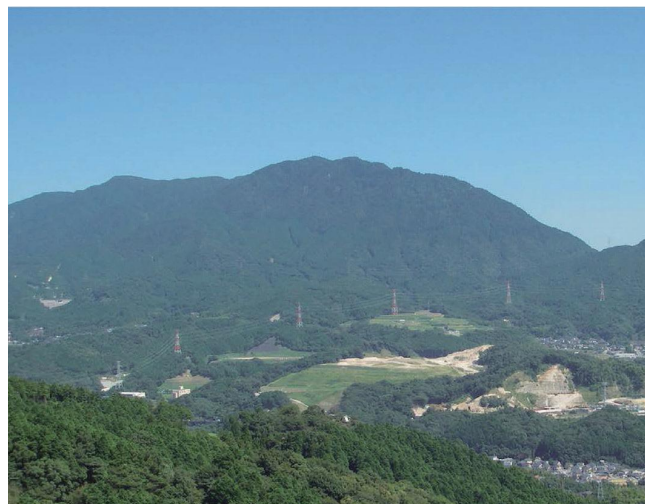


写真 2-23 宝満山遠景（西斜面 太宰府市側）